

鶴岡工業高等専門学校

研 究 紀 要

第 5 7 号

RESEARCH REPORTS  
OF  
NATIONAL INSTITUTE OF TECHNOLOGY, TSURUOKA COLLEGE  
No. 57

2 0 2 2

鶴岡工業高等専門学校

鶴岡工業高等専門学校研究紀要 第57号  
(2023年3月)

————— 目 次 —————

<原著研究論文>

菅野 智城：『教育論』におけるミルトンとサミュエル・ハートリブの関係とエリート主義的性質・・・・・・ 1

<総説>

石井 智子：富岡製糸場と伝習工女をめぐって・・・・・・ 7

RESEARCH REPORTS  
OF  
NATIONAL INSTITUTE OF TECHNOLOGY, TSURUOKA COLLEGE  
No. 57  
MARCH 2023

————— Contents —————

Tomoshiro KANNO

Milton's Relationship with Hartlib Circle and Elitist Nature in *Of Education*・・・・・・ 1

Tomoko ISHII

Tomioka Silk Mill and Its Female Trainees・・・・・・ 7

# 『教育論』におけるミルトンとサミュエル・ハートリブの関係と エリート主義的性質

菅野 智城

## Milton's Relationship with Hartlib Circle and Elitist Nature in *Of Education*

Tomoshiro KANNO

(Received on Jan. 31, 2023)

### Abstract

John Milton's *Of Education* stands out from other educational tractates published in the middle of the seventeenth-century England. This is because his tractate sets the development of national leaders as the purpose of education, rather than educational reform or school improvement for the relief of the poor. This is often cited as the reason why his educational tractate is considered elitist. However, such elitist tendencies do not imply an exclusive educational plan for young people from privileged backgrounds, but rather a comprehensive educational plan aimed at the development of rational and virtuous individuals through education.

キーワード：ミルトン、『教育論』、ハートリブ、エリート主義

### 1. はじめに

17世紀イングランドの詩人ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-74) が1644年に発表した『教育論』 (*Of Education*) は、教育思想家サミュエル・ハートリブ (Samuel Hartlib, c1600-62) の熱心な要請を受けて書かれた。ポーランド人の父とイングランド人の母をもち、プロイセンのエルビングに生まれたハートリブは、1628年にイングランドに定住した後、非公式の知的ネットワーク、いわゆるハートリブ・サークルを結成し、農業、科学技術、教育などの分野において活動を展開した人物である。彼はサークル内外で交流ある知識人の著作を紹介、出版していることから、思想家であると同時に後見人として影響力をもつ人物でもあった。また、彼はチェコの教育思想家コメニウス (John Amos Comenius) のイングランド訪問を実現させた人物としても知られている。ハートリブ・サークルを通じて多くの教育パンフレットが出版されたが、その多くは社会政策上の教育改革案としての性格が強いものであった。

一方、この時期のミルトンは、妻メアリーとの別居後に書いた『離婚の教理と規律』 (*Doctrine and Discipline of Divorce*) が幼少時代の恩師トマス・ヤング (Thomas Young) から長老派幹部から猛反発を浴びていたこと、さらには言論と出版の自由を論じた『アレオパジティカ』 (*Areopagitica*) の出版準備に忙しかったこともあり、『教育論』の執筆には積極的ではなかった。またミルトン自身、当時のイングランドで広がりを見せていた教育改革に強い興味をもっていたとは言えず、教育改革論者が好むカリキュラム改革の是非についての議論に参加することを避けている。

ミルトンは自身の教育プランの対象者を「我らの選り抜きの有望な若者たち」 (our choicest and hopeful wits) (*CPW* 2: 377)、「我らの高貴で生まれのよい若者たち (our noble and our gentle youth) (406) と設定し、教育の目的を国家の指導者にふさわしい人材の育成と位置づけている<sup>1)</sup>。そのため、『教育論』はしばしばエリート主義的であるとの評価が下されている。確かに、『教育論』ではある程度の家柄が前提とされているように思われる。しかし、ここで言う“noble”や“gentle”などの言葉が意味するのは、優秀な指導者となるにふさわしい人格的な資質であり、そしてそれは彼の叙事詩

『パラダイス・ロスト』(Paradise Lost) 第 7 巻冒頭に見られる「少ないながらもふさわしい聴衆を見つけたまえ」(fit audience find, though few) (7: 31) という姿勢に支えられているのである。

また『教育論』では、リベラル・アーツを中心に据えた人文主義的な教育プランが提示されている。特にギリシア・ラテン語の習得には力が入れられており、これらの古典語で書かれた著作をとおして獲得される普遍的な教養が人間形成に資するとしている点から、ミルトンは「人文主義的な教育モデルを完成する」(Chaplin 289) ことを目指していると言える。これは社会的地位獲得の手段として高等教育を求める当時の実利主義的傾向とは立場が異なる。教育改革が叫ばれた 17 世紀中頃のイングランドにおける実利主義と伝統的教養教育の対立からは距離を置き、教育の意義そのものに目を向けるミルトンの姿勢は、効率性や方法論が成熟を迎えつつある現代の教育に対しても示唆的であろう。以上のことを踏まえ、本論ではハートリブ・サークルとの関係性に着目しつつ、『教育論』に見られるエリート主義的な性質について考察する。

## 2. 『教育論』出版におけるハートリブとの距離感

ハートリブ・サークルをとおして発表された教育改革案は、貧民層の解消と実務的な職業訓練の性格が強いものであった。学校開設、教師の配置、給与の保障を主張する彼らが特に力を入れたのは、情報局 (the Office of Address) の設置である。これは教育、就職、商工業の分野における職業斡旋と、学術的な情報の管理という機能をもつことを意図された機関 (相馬 55-56) である。この情報局構想は、上流階級と下層階級の極端な経済的格差を解消し、実務的教育を与えた後も貧民層の子弟の生活を保障するためのものであった。

ハートリブ・サークルが社会の下層に目を向ける一方、ミルトンはどうであろうか。彼は教育が社会的地位獲得のための手段に成り下がり、野心と利益を求める神学者、訴訟手数料を期待する弁護士が幅をきかせる状況を問題視しているものの (CPW 2: 375)、だからといって実学教育の是非について議論を展開しているわけでもない。教育改革に熱心であるハートリブの要請にもかかわらず『教育論』の分量が 8 ページと少なく、また十分な準備もなく書かれたことは、冒頭で「急を要する」(CPW 2: 363)、「気の向くままの考え」(364) と述べられていることからもうかがえる。また、バーバラ・ルワルスキーが指摘しているように、タイトルページも著者名もない簡潔な書式は、それがハートリブ・サークルと他のいくつかの集団への限定的な流通のために個人的に印刷されたものであることを物語っている (172)。このように、ミルトンが『教育論』執筆に消極的であったのは、時間的な理由に加えて、ハートリブと彼が信奉するコメニウスの教育理念への関心の薄さによるものであろう。これは、冒頭で簡潔な内容に終始するとミルトンが宣言していることから読み取れる。

私は、短くするよう努力する。というのも、ここで私が述べることは、この国が究極的に必要としていることが語られるよりもすぐになされるべきものであるからだ。したがって、古代の名高い作家から私が恩恵にあずかったものについて述べることを私は遠慮したい。そして、私が読めるよりずっと分量の多い最新の『扉』や『大教授学』が計画するものを求めることには、私の気が向かない。(CPW 2: 364-66)

ミルトン自身、教育を取り巻く当時の状況に対しては批判的な立場をとっているものの、コメニウスの『開かれた言語の扉』(Janua linguarum reserata) や『大教授学』(Didactica magna)<sup>2)</sup> などの著作についての議論をそれとなく避けている。これは全国的な学校システムの整備を目指すハートリブとコメニウスが掲げる万人教育思想がミルトンの主な関心事ではなかったからであろう。『教育論』で展開される話題は、貧民層の解消を目的とする教育の機会均等化ではなく、あくまで国家を正しい方向に導く指導者の育成を目的とする教育プランおよびカリキュラムである。

私が完全で、気高い教育と呼ぶものは、平和時と戦争時の私的、公的職務の全てを公正に、有能に、そして雅量をもって果たすのにふさわしいものである。(CPW 2: 377-79)

この箇所に見られる「雅量をもって」(magnanimously) という言葉は、ミルトンの教育観を考えるうえで重要な意味をもつ。ドナルド・ドリアンが注解を加えているように、「雅量」(magnanimity) とはラテン語の “magnus animus” (大いなる魂) を語源にもつ。これはアリストテレスが『ニコマコス倫理学』で述べた “μεγαλοφροσύνη” (メガロプシュキア)

に由来するものであり (CPW2:379)、ミルトンが理想的な人間像を語るうえでは無視することのできない美德である。たとえば、天使ラファエルによるアダムの教育の場として機能する『パラダイス・ロスト』第7巻では天地創造について解説がなされるが、生物の創造の仕上げとして「自己を知り、それゆえ神と交わるための雅量をもつ」(self-knowing, and from hence / Magnanimous to correspond with heaven) (7:510-11) 人間の創造が宣言される。ここでは「汝自身を知れ」というソクラテスの言葉、アリストテレスの「大いなる魂」、そしてミルトンが神との対話を可能にする美德であるとする「雅量」が互いに反響し合うのである。ギリシア的な意味合いをもつ「雅量」が人間のあり方に即した概念である一方で、ミルトンのいう「雅量」とは「旧約聖書に出る、アブラハム、サムエル、ヨブ、キリスト、パウロなどの神への信徒をとおした諸人物に対して神から与えられた尊厳をさしていることば」(新井 72)に近い。ミルトンは国家を正しく導くことのできる人間像を、『雅量』という古典的な概念にキリスト教的な意味を融合させ(佐野 197)ることによって支えているのである。

ミルトンが教育をとおして国家の指導者育成を目指す一方、コメニウスはすべての人が、すべてのことを、すべての面にわたり教えられるという汎知学(パンソフィア)の立場をとっている。これは、激動の内乱期を生きるミルトンにとっては悠長な理想主義に映ったのかもしれない。このように、教育機会の拡大や学校システムの整備を主張するコメニウスおよび彼を信奉するハートリブと、国家の指導者育成を目的として人間性に根差した独自の教育理念を議論するミルトンの間には、つねに距離感がつきまとうのである。

### 3. 『教育論』のエリート主義的性質とその評価

国家の指導者育成を目標に掲げる『教育論』がエリート向けの教育プランと位置づけられ、ミルトンを教育改革に否定的な人物、あるいはグラマー・スクール同様の伝統的教育の信奉者とする評価がついて回るのは、その内容が人文主義的であるからに他ならない。『教育論』はギリシア・ラテン語の習得に力点を置く一方で、自然科学の学問分野については古典の著作を列挙した印象が強く、科学的アプローチや方法論が具体的かつ実践的に示されているわけではない。そのような評価に対しクリストファー・ヒルは、『教育論』がエリート主義的でコメニウスの進歩的な計画と合わないと考えことは国家の指導者となる若者のためのアカデミー構想という目的を誤って理解することになると述べている。ヒルはミルトンが推奨する学校がイングランド全域の都市に設置されることを期待している点を根拠に、その教育プランはルネサンス的でありながらハートリブのそれと政策上一致する新しい教育プログラムであると評価している(147)。ヒルの肯定的な評価に対し、ミルトンの教育プランを「私設のアカデミー」と位置づけるルワルスキーは、ミルトンがコメニウスやハートリブの支持する実践的で経験的な学習、学校設立への公的資金の投入を説いてはいるものの、階級や性別に関係なく包括的に統合された学校システムの構築には消極的である点で、彼らの教育理念とは性質が異なると述べている(174)。またアンナ・ピアは、難解な言い回しを将来有望な若者に無理強いすべきではないとする姿勢には一定の理解を示しつつも、国家の指導者育成を教育理念として掲げるがゆえにそれが男子の教育に重点を置いている点を指摘したうえで、有能な男性市民の教育にこだわるあまり議論の可能性を閉じているミルトンは大陸のプロテスタントの思想家ほどリベラルではない(160)、とやや皮肉を込めて述べている。

当時の教育を取り巻く現状に批判的であったミルトンとハートリブではあるが、両者の教育理念は根本的に異なる。にもかかわらず、ハートリブがミルトンに教育パンフレットの執筆を要請したのは、ミルトンの文学上の名声によるところが大きい。つまり、ハートリブはミルトンのペンの力による教育改革への支持を取りつけることで、あらゆる階級における教育改革の後見人となることを目指したわけである。したがって、ミルトンのエリート主義的とも受け取れるアカデミー構想がハートリブ・サークルから出版された多くの教育パンフレットと性質を異にするものであっても、それは不自然なことではない。

ハートリブを中心とする教育改革論者は、既存の教育制度や教授法に対して不満を抱き、特に貧民層の教育機会の拡大を強調した。しかし先にも述べたように、ミルトンはハートリブ・サークルに馴染みのある話題にはさほど関心を示してはいない。たしかに、ミルトンの『教育論』は、文学的な雄弁術が社会の中心的役割を占める人文主義的視点と、教育の再編に注力する改革者の視点の調和につとめており(Koslow 24)、その点においてはハートリブおよび彼の支持者との意見の一致を見ることは可能である。しかし、ミルトンは人文主義的教育の伝統の枠からは決して逸脱してはならず、ハートリブが目指す職業訓練的な側面をもつ普遍的万人教育を問題として扱ってはいないのである。ミルトンの人文主義的教育プランは、国家の有能な指導者育成を目的にしている以上、それがエリート主義的であるとの評価は

妥当であると言えよう。

#### 4. 『教育論』を支える二つの言葉 — “our noble, and gentle youth” と “fit audience find, though few”

教育の目的を国家の指導者育成に置く『教育論』のエリート主義的な姿勢は、二つの言葉 “our noble, and gentle youth” と “fit audience find, though few” によって支えられている。ここではそれら二つの言葉について考えてみたい。

ミルトンのエリート主義的傾向についてまず問題となるのは、教育の対象が家柄のよい貴族や上流階級出身者に限定されるのかという点である。これについては次の一節が必ずといってよいほど引用されている。

これが、我らの高貴で生まれのよい若者たちが、12 歳から 21 歳までに訓練的なやり方で時間を費やさねばならない学問である。(CPW 2: 406) [下線筆者]

「我らの高貴で生まれのよい若者たち」(our noble, and gentle youth) は、文字どおりには家柄を意味する。社会的階級が影響力をもつイングランドの社会構造において、ここではある程度の家柄が前提とされていることは否定できない。しかし、ミルトンが(彼自身が理想と考える)学校の全国的な配置にも目を向けていることを考えると、彼のアカデミー構想の教育対象は従来のエリート層出身者よりも広く設定されていると考えられる。実際、17 世紀前半には経済発展とともに教育の需要が高まったことで、中流階級出身の大学入学者が増加した。しかし結局のところ、聖職者、弁護士、医者といった社会的地位のある職業への近道として高等教育、すなわち学歴が求められる傾向が強まった。このような実利主義的な風潮に対して、ミルトンは「平和時と戦争時の私的、公的職務の全てを公正に、有能に、そして雅量をもって果たすのにふさわしい」人材の育成に教育の本質を見出している。つまり、“noble” や “gentle” という言葉は、家柄や階級というよりもむしろ、彼の理想とする教育を受けるにふさわしい人格的な資質を意味するものであり、そのために求められる教育の価値が『教育論』では論じられていることを理解する必要がある。

このような、人間性に根差したエリート主義的な姿勢を支えるもうひとつの言葉として、“fit audience find, though few” (下線筆者; 少ないながらもふさわしい聴衆) を挙げることができる。これは『パラダイス・ロスト』第 7 巻の冒頭の詩神ウラニアへの呼びかけのなかで見られる言葉で、そこには詩人が読者を選別するような姿勢が見え隠れする。

闇の中、危険と孤独に囲まれてはいるが、  
しかし一人ではない。汝が私の眠りを夜毎訪れている間は、  
あるいは朝が東の空を赤く染める時には、  
汝、絶えず私の歌を取り仕切りたまえ、  
ウラニアよ、そして少ないながらもふさわしい聴衆を見つけたまえ。(Paradise Lost 7: 27-31)

この呼びかけに続き、天使ラファエルはアダムに天地創造の歴史を語り聞かせることになるが、それは神と悪魔の対立が読者の感情を掻き立てる『パラダイス・ロスト』のなかでも、読者にしてみれば長大な歴史の概説授業のような、やや退屈に感じられる部分である。それを踏まえたうえでの “fit audience, though few” という言葉には、耳あたりのよい数字やビッグネームあるいは刺激的な描写ばかりを追い求め、真理や知恵の本質を理解できない読者を拒否する姿勢が示されているのである。このように、理解力の足りない読者の門前払いというスタイルは “our noble, and gentle youth” と反響し合うのである。ミルトンのエリート主義的な教育観は、これら二つの言葉が示唆する、教育を受ける側の資質に支えられている。

#### 5. おわりに

ここまで、ハートリブ・サークルとの関係とともに『教育論』のエリート主義的な性質について見てきた。実際のところ、人文主義的な内容に終始するミルトンが教育という主題にどれほど関心があったのか疑問が残る。たしかに、ギ

リシア・ラテン語といった古典語の習得に力点を置く姿勢は、当時の教育改革の流行に合致したものであるとは言えないだろう。しかしながら、『教育論』は、教育改革の提言というよりもむしろ自由共和国実現のために人間の内面に根差した全人格的な教育書と位置づけることの方が妥当である。伝統的な人文主義的教育の意義を問い直し、国家という広い視点で議論が展開されるという意味では、『教育論』は伝統的なエリート主義を貫きながらも、それはミルトンのオリジナリティーとも言えるキリスト教的な視座を抛りどころにする人間像、さらには彼の晩年の詩作品に見られる英雄像の形成へとつながるものである。

## 注

- 1) 本章では『教育論』からの引用はすべて *Complete Prose Works of John Milton* による（以下 CPW と略す）。また、本稿中の英語文献からの引用の日本語訳はすべて筆者によるものであるが、*Of Education* の日本語訳には私市 元宏・黒田 健二郎訳『教育論』（未来社、1984年）を参考にした。
- 2) 『大教授学』は当初、コメニウスの母国語であるチェコ語で書かれたが、その後ラテン語版が1639年に完成し、1657年に公刊されている。

## 引用文献

- Beer, Anna. *Milton: Poet, Pamphleteer and Patriot*. London: Bloomsbury, 2008.
- Chaplin, Gregory. "Education." *Milton in Context*. Ed. Stephen B. Dobranski. Cambridge: Cambridge UP, 2010.
- Hill, Christopher. *Milton and the English Revolution*. New York: Viking, 1978.
- Koslow, Julian. "'Not a Bow for Every Man to Shoot': Milton's *Of Education*, between Hartlib and Humanism." *Milton Studies* 47 (2008): 24-53.
- Lewalski, Barbara K. *The Life of John Milton: A Critical Biography*. Oxford: Blackwell, 2000.
- Milton, John. *Complete Prose Works of John Milton*. Gen. ed. Don M. Wolfe. Vol. 2. New Haven: Yale UP, 1959.
- . *John Milton: Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. 2nd ed. London: Longman, 1998.
- 新井 明 『ミルトン』 清水書院、1997年。
- 佐野 弘子 「イギリス・ルネサンス詩人における自己形成型の系譜」 佐藤 紀子他 『イギリス・ルネサンス期の言語と文化—時代精神と自己形成—』 英宝社、2010年。
- 相馬 伸一 『教育思想とデカルト哲学—ハートリブ・サークル 知の連関』 ミネルヴァ書房、2001年。





## 富岡製糸場と伝習工女をめぐって

石井 智子

キーワード：世界遺産、富岡製糸場、伝習工女

### はじめに

2014年6月21日、カタールのドーハで開かれた世界遺産委員会で、群馬県の「富岡製糸場と絹産業遺産群」が、正式にユネスコの世界文化遺産に決定した。これは富岡製糸場を中心に、近代養蚕農家の原形である「田島弥平旧宅」（伊勢崎市）、蚕の卵の貯蔵所であった「荒船風穴」（下仁田町）、養蚕法を普及させた教育機関である「高山社跡」（藤岡市）の4か所をさす。

この富岡製糸場は、群馬県の交通の要衝である高崎市から南西の方角20キロほどの富岡市にある。そこで今回は、筆者が最近見学した群馬県にある「富岡製糸場」についての諸研究を紹介することにしたい。

### 1. 教科書記述から

まず富岡製糸場について、学齢に達した児童たちは、どのように学習していくのだろうか。小学校を手始めに中学校・高等学校と順次概観していくことにする。

(1) 『新しい社会 6 歴史編』（平成31年3月26日検定済、令和4年2月10日発行、東京書籍）

富岡製糸場は、第9章「明治の国づくりを進めた人々」の第3節「大久保利通と明治政府の改革」に位置付けられている。本節は「調べる」というテーマのもと「欧米に学んだ大久保利通は、どのような国づくりをめざして取り組んでいたのでしょうか」という発問がなされている。

ここでは、「廃藩置県」、「富国強兵」と述べられた後、「帰国した大久保らは、近代的な工業（機械による大量生産）を始めるために、外国から機械を買い、技師を招き、製糸、紡績、兵器製造などで、国が運営する官営工場を開きました（殖産興業）」（106-107ページ）と記されている。そして欄外に「工業をさかんにする（殖産興業）」として「官営富岡製糸場（群馬県）」の図版が示され、政府は、模範的な製糸場をつくる方針を定めて、フランス人の技師を招きました。富岡製糸場は、1872年に完成し、全国各地で女子の労働者を募集しました。糸繰りの機械300台が設置された、とても大きな工場で、働いていた女性の日記には次のように記されています。

「富岡製糸場の前に来たときは、夢かと思うほどおどろきました。生まれてかられんがづくりの建物など、錦絵で見ただけで、それを目の前に見るのですから、無理もないことです。」

と説明されている（106ページ）。なお、この後者の「日記」とは和田英の『富岡日記』である（ちくま文庫、20ページ、筑摩書房、2014年）。

(2) 『社会科 中学生の歴史—日本の歩みと世界の動き』（平成27年3月31日文部科学省検定済、令和2年1月20日発行、帝国書院）

「富国強兵をめざして」という節に記述がある。ここでは「学習課題」として「日本を欧米諸国に劣らない強い国にするために、どのような政策が行われたでしょうか」という問題提起がなされ、「富国強兵の政策」に続いて「殖産興

業」の項目において、

新政府は、まず「富国」のため、お雇い外国人とよばれた外国人技術者や学者を招きました。欧米の進んだ技術や機械を取り入れ、各地に製糸・紡績などの官営工場や軍需工場をつくり、近代的な産業を育てようとしたのです(殖産興業)。(160 ページ)

と記され、欄外に「官営工場として建てられた富岡製糸場【世界遺産】とその内部」の図版が示され、「重要な輸出品である生糸を製造するため、近代的な設備を整えた製糸工場のモデルとして、1872 年、群馬県の富岡に建てられました」という説明がなされている。

また、女子中学生と思しきキャラクターが登場し、その吹き出しに「江戸時代の綿織物の生産(→p.127④)と比べて、どのようなところが違うのかな」という問題提起がここでもなされている。その 127 ページに掲載された図版は「問屋制家内工業による綿織物の生産と商品の買いつけ」と題されたものであり、「資料活用」として「上の絵の中の A〜ウは、下の A〜C のどれにあたるでしょうか」と発問がなされ、「A 織物を買いに来た商人、B 商人と売りわたしの商談をする農家の主人、C 部屋の中で機を用いて織物を織る女性」という選択肢が付されている(127 ページ)。

(3)『詳説日本史 改訂版』(2016 年 3 月 18 日 文部科学省検定済、2020 年 3 月 5 日 発行、山川出版社)

第 9 章「近代国家の成立」における「殖産興業」の項目を「政府は富国強兵をめざして殖産興業に力を注いだ」と書き起こし、封建的諸制度の撤廃、土地所有権の確定による自由な経済活動の前提の整備、「ついで外国人教師(いわゆるお雇い外国人)の指導のもとに近代産業を政府みずから経営して、その育成をはかった」と進め、工部省の設置、鉄道の敷設、炭坑や造船所等の経営、軍工廠の設置及び拡充、通信制度の整備、海運を国内企業に掌握させ軍事輸送を念頭において三菱に手厚い保護を与えた、等々を述べる(267 ページ)。そして、

一方、政府は民間工業を近代化し、貿易赤字を解消しようと輸出の中心となっていた生糸の生産拡大に力を入れ、1872(明治 5)年、群馬県に官営模範工場として富岡製糸場を設け、フランスの先進技術の導入・普及と工女の養成をはかった。(267-268 ページ)

と説明し、図版においては「富岡製糸場の内部」と題して、次のような説明が付されている。

富岡製糸場は、1871(明治 4)年に建設に着手し、翌年から開業した。工女の多くは各地から応募した士族の子女で、「富岡工女」の名で知られた。機械類はフランスから輸入し、煉瓦を用いた洋風建築の建物は現存している。

(4) 小中高の教科書比較

ここで、標記について問題点を幾例か示しておく。

- ① 小学校用では大久保利通を中心に述べられていることから、人物学習を主題に据えていることがわかる。
- ② 小学校用では「近代的な工業を始めるために」とするが、中学校用では図版の説明の中に「重要な輸出品である生糸を製造するため」と明記され、高校用では「貿易赤字を解消しようと輸出の中心となっていた生糸の生産拡大に力を入れ」とより明確に記されている。
- ③ 小学校用では「全国各地で女子の労働者を募集」と記すにとどめるが、高校用では「官営模範工場」として、「フランスの先進技術の導入・普及と工女の養成をはかった」と、その目的がより明確に示されている。
- ④ 図版について、小学校用ではその出典が示されていないが、中学校・高校用では示されている。一方、小学校用では和田英の『富岡日記』が引用され、当時和田英が工場という煉瓦造りの建造物に圧倒された状況が伝わるように工夫されている。
- ⑤ 中学校用では「江戸時代の綿織物の生産」との比較、綿織物から「問屋制家内工業」、「商品の買いつけ」の用語が登場し、「工業の発展と変わる農村」というタイトルが示すように、視野の拡大がはかられている。

また、中学校用では「タイムトラベル⑧」として「明治時代をながめてみよう(1880~90 年代ごろのある場面)」が 2 ページにわたって示され、発問のひとつは「たくさんのまゆを、製糸工場に運んでいます」の個所を指摘するようになっている。

さらに、「歴史を探ろう」というテーマで2ページにわたり「世界に開かれた港 横浜～開港とともに広がった文明開化～」と題して「1、どうして横浜が港になったのかな?」、「2、横浜から何が広まったのかな?」、「3、居留地はどのようなところだったのかな?」、「4、横浜港から何が輸出されたのかな?」という設問が付され、それぞれに説明として解答例が示されている。ことに最後の設問については「開港当時は中国がイギリス・フランスと戦争中で、中国産生糸の輸出が減っていたため、生糸が高値で取り引きされました。その後も生糸の輸出は好調で、横浜港の輸出総額は70%以上をしめる年もありました。これは横浜だけでなく、養蚕農家や製糸場などにも大きな影響を与えました」とあり、世界史との関連を含めて横浜貿易の影響の導入が示唆されている。

この横浜貿易の影響については、「地域史」という囲み記事で「横浜港と『絹の道』」が示され「生糸の輸出がのびるとともに、長野県や群馬県、栃木県などで養蚕ブームが起こりました。(後略)」から始まり、産地から横浜へのルート、養蚕農家や横浜の商人への言及もあり重要である。

## 2. 富岡製糸場の設立について

### (1) 中村哲著『明治維新』に学ぶ

標記の文献は集英社版『日本の歴史』第16巻(1992年)である。発行年次は古いですが、今なお光彩を放っていると筆者は評価している。

まず中村氏の「殖産興業」という用語についての解説から説き起こしたい。氏は「明治初年、政府は、欧米列強の主導する世界資本主義体制のなかで、日本の独立を維持し、欧米に対抗できる国力をつくってゆく必要があることを強く意識していた。しかし、それをどのような政策によって実現してゆくかということは、なかなかむずかしい問題であり、明治政府も多くの失敗を重ねてきた。政府の経済近代化政策、とくに官営事業を中心とする工業化政策を『殖産興業』というようになるのは、殖産興業が終わりを迎える明治一〇年代後半からである。『殖産興業』とは、あとになってからつけられた名称であり、殖産興業政策が一貫した体系的なものではなかったことを示している」と説明する(194ページ)。

次に「輸出産業の発展」という視点から「日本生糸の危機」に進みたい。中村氏は「一八五九年(安政六)の開港から昭和のはじめまでの約七〇年間にわたって、生糸は日本の輸出品の首位を占めつづけた。とくに幕末には輸出額の五〇パーセント以上、明治前期にも三五～四〇パーセントを占めていた。しかもその原料の繭もすべて国内で生産され、器械設備も国産であって、完全な外貨獲得産業であった」、「工業化の成功の条件の一つは、必要な外貨をどのようにして確保するかにかかっているが、日本が工業化に成功したのは、製糸業という大きな外貨獲得産業をもっており、またそれが急速に発展したことが大きい」と、製糸業の重要性を述べる(238-239ページ)。

しかし、明治初年には製糸業と生糸輸出が危機を迎えるのである。当時の主要輸出品は生糸・茶・産卵紙であったが、「一八五〇年代からヨーロッパで蚕の微粒子病が流行し、主要な生糸生産国であるフランス・イタリアなどの生糸生産が大打撃をうけ、また世界最大の生糸輸出国であった中国は太平天国の乱(一八五一～六四年)のために生糸輸出が激減していた」ことにより、幕末期の日本の生糸輸出は好調であった(227ページ)。

ところが、「明治に入るとヨーロッパの蚕の微粒子病がフランスの科学者L・パスツールの研究によって解決され、イタリア・フランスの生糸生産が回復し、また太平天国の乱も終わって、中国の生糸輸出も増加した」ために日本生糸の輸出条件は急速に悪化していったのである(227ページ)。また開港以後の輸出の急増と価格の騰貴につれて、「生産者の関心は品質維持よりも生産量の増大に向けられ、粗製乱造による日本糸の評価が急速に下がってしまったのである(240ページ)。

その打開策として官営模範工場富岡製糸場の建設が推進されていくのであった。中村氏は、富岡製糸場の設立にあたった渋沢栄一の「是非伊仏のやうに器械製糸に改めて、以て経糸として立派の生糸を産出する様にしなければならぬと云ふので、先ず富岡製糸場を設立する事になり、之が設計監督の任には悉皆余が当たったのである」(『渋沢栄一伝記資料』二)という言を引くのである(241ページ)。そして1870年6月、フランス人ポール・ブリューナを雇い入れ、工場の適地を調査し、富岡が選ばれるのであった。

しかし、大規模な洋式器械製糸工場の建設には多くの困難がともない、建設資材(レンガやセメント)の調達や工場の図面がメートル法のため日本人大工には役に立たない、等々の問題があったが、それを乗り越えて1872年6月に大工場が完成したのであった。

次の困難は工女の募集であった(242 ページ)。1872 年 2 月から募集が始まったものの、工場設備があまりにも大規模で洋式化しており、当時「異人は募集した工女の生血を絞って吸う」という流言が広がり、応募者が全くなかったのである。5 月に政府は「告諭書」を出し、その流言を否定し「右女職人ハ製糸技術伝習ノ上ハ御国内製糸ノ教師ニ成サレ度御趣意ニ候ヘバ、決シテ疑念無ク伝習ノ為差出申ス可ク」と懸命に訴えたのである。

それでも不十分で、製糸場長の尾高惇忠は自分の長女勇(13 歳)を第一番の工女として採用し、その流言を否定したのである。また、政府から各県へ、県から村々の戸長へ半強制的に割り当て、そのために村の上層農民や旧藩士族の娘が応募することになり、1873 年 1 月までに 404 名が入所したのである。

お雇い外国人のブリューナはフランスから器械を購入するとともに、フランス人職工・工女(教諭)を雇い入れたのであった。

その設備は、当時のフランス・イタリアでも最先端のものであり、ブリューナ以下の指導と相俟って、早くも 1873 年(明治 6) 5 月のウィーン万国博覧会で、日本製品として最初の第二等進歩賞を得ている。

さて、富岡製糸場の意義について、中村氏は「官営模範工場として建設されたが、その目的はその後、十分に達せられたとあってよい」と直截に述べる。その上で、その意義を 3 点にわたって挙げる。すなわち、「第一は、富岡製糸場にならば、それを簡易化した中小の器械製糸工場が続々と建設されてゆき、それによって日本の生糸の品質向上と生産力の発達が実現した」、「第二は、富岡製糸場が全国から伝習工女を受け入れた」ことであるとして、1874~84 年の間の 7 年間(4 年分欠)の資料によると 1 道 3 府 26 県から延べ 3238 人の在籍があり、「これらの工女の多くは技術を習得して帰郷し、新しい製糸工場で指導的地位についたのであり、その効果は大きかった」、「第三は、近代的な工場制度が移植された」ことであるとして、300 釜という大規模な繰糸部門では、25 釜に 1 人の教婦をおき、50 釜に 1 人の繰糸監督がついて工女の技術指導と監督にあたった。また選繭部門では入念な原料繭の選別、検査部門では厳格な品質管理がおこなわれるなど、生産工程全体にわたって品質管理がおこなわれた、と具体的に記すのである(243 ページ)。

氏は、その後段で「中小器械製糸工場の誕生」として、「富岡製糸場の流れを汲む民間の製糸工場の代表的事例として、長野県松代近郷の西条村製糸場(のちの六工社、一八七四年開業)」を取り上げ、「西条村大字六工の大黒忠一郎は富岡製糸場を模範とする洋式製糸工場の創設を思い立ち、協力者横田数馬の娘英(和田英)ほか一五人の伝習工女を富岡に派遣し、自分自身も工場をくわしく調査し、男子の伝習生も送って設備面を研究させ、五〇釜の工場を建設した」と述べ(244 ページ)、『富岡日記』の記述を引用するのである。

氏は「富岡製糸場の器械・設備を模倣しながら、それらを簡易化・小規模化し、すべて国産でつくりあげた」。これは経営的・技術的に必要なことであり、「経営的には、富岡製糸場のような大規模な輸入の器械や設備は、当時の民間企業の資本力ではととのえることはほとんど不可能であったし、たとえできたとしても少数の大資本だけであり、また採算をとることが困難であった」として、「富岡製糸場の建設費約二〇万円に対し、西条村製糸場の建設費は二九五〇円ですみ、一釜あたりでは六六〇円対五九円で、一〇分の一以下」という具体的数値をあげ、「富岡よりも生産性や品質では劣っても、従来の座繰や手繰にくらべれば、すぐれた器械製糸工場の建設が可能になった」と評価する(245 ページ)。換言すれば、「とくに器械製糸の有利性に着目し、近代的設備・技術を学びながら、同時に日本の在来技術を動員し、器械製糸工場をつくり出して経営してゆく能力をもった先進的企業者が出現していったことが重要である」と纏めるのである(246 ページ)。

## (2) 今井幹夫氏の研究

富岡製糸場研究の第一人者として今井幹夫氏の存在がある。氏は群馬県甘楽郡南牧村生まれ、富岡市内の小学校教諭、校長を歴任し、2009 年より富岡製糸場総合研究センター所長を務めた。その間、南牧村誌、妙義町誌、富岡市史、安中市史の編纂に携わったことが重要である。

今井氏には『富岡製糸場の歴史と文化』(みやま文庫代表:群馬県知事、2006 年)があり、より一般的な著作として『富岡製糸場と絹産業遺産群』(KK ベストセラーズ、2014 年)がある。

本節では、今井氏の後著によって「設立の背景」について述べていく。氏は 1、「蚕種と生糸は日本最大の輸出品」、2、「日本に頼る欧米諸国」、3、「盛況な蚕糸類輸出にも影が…」、4、「外国人による養蚕地帯の現況視察」、5、「外国資本の導入を迫る」、6、「官営の製糸場設立へ」、7、「富岡が選ばれたわけ」、8、「富岡と絹の縁」、9、「入念な調査と対策」、10、「50 日で完成した設計図」、11、「建築資材の調達」、12、「製糸器械は『フランス製富岡式』」の諸項目から構成されている(諸項目の前に入れた番号は、筆者が便宜的に付したものである)。

ここで注目すべき点は、4 と 7 と 12 であろう。まず 4 について、1869(明治 2) 年 4 月にイタリアの特命全権公使の

一行、5月にイギリス公使館の書記官アダムスも視察を行う。このイギリス視察団に、「のちに富岡製糸場の建設責任者で、初代首長となるフランス人のポール・ブリュナも加わって」いたのである(27-28ページ)。アダムスは2回にわたって報告書を作成、翌1870年にも上州、信州、越後を視察、その報告は「女王陛下の命により、英国両院議会に提出」され、結論として今井氏は「アダムスが関心を寄せたのは、横浜から大量の蚕種紙が輸出され、優良生糸として特に高い評価を得ていた下仁田生糸の生産状況でした。実際に農家を回り、川が近くを流れること、谷が集まる地形で新鮮な空気の流れを確保できることなど地理的な好条件が確認でき、蚕の成長に合わせて桑を選んでいることや、別棟で飼われていることなど農家の取り組み方も目にしました」と考察している(30ページ)。

次に7について、今井氏は箇条書きに纏めている。すなわち「①富岡町は古くから養蚕が盛んで、原料繭の確保ができる。②広い敷地が確保でき、地元の人でも建設に反対しなかった。③製糸に必要な多量の水が確保できる。④器械の動力源としての石炭が現地で調達できる。⑤風景も良く、環境的にも優れている」の諸点である(35ページ)。

最後に「フランス製富岡式」について、ブリュナは自分の目の前で日本女性に座繰り製糸や揚げ返し工法の作業をさせ、「その技術とそこから生まれる生糸の質を改めて高く評価したうえで」、「ヨーロッパ女性よりも体格の小さな日本女性が作業しやすいように」器械の高さを低く改良、「もう一つは、機能の追加」であるがここでは割愛する。氏は「器械はフランス製の輸入品でしたが、使用は日本独特なもので『富岡式』と呼ぶこともできるでしょう」と総括する(43-44ページ)。

### 3. 伝習工女について—『富岡日記』を読む—

和田英(旧姓横田)の『富岡日記』は、「明治六、七年松代出身工女富岡入場中の略記」と題され、「著者が一八七三(明治六)年四月から翌七四年(明治七)年七月まで富岡製糸場で伝習工女として働いた時のことを思い返し、一九〇七(明治四〇)年に記述したものである」と簡潔に紹介されている(前掲『富岡日記』10ページ)。

その書き出しは「私の身元」として、次のように記されている(11ページ)。

私の父は信州松代の旧藩士の一人でありまして、横田数馬と申しました。明治六年頃は松代の区長を致して居りました。それで信州新聞にも出て居りました通り、信州は養蚕が最も盛んな国であるから、一区に付き何人(たしか一区に付き十六人)十三歳より二十五歳までの女子を富岡製糸場へ出すべしと申す県庁からの達しがありましたが、人身御供にでも上るように思ひまして一人も応じる人はありません。父も心配致しまして、だんだん人民にすすめますが、何の効もありません。やはり血をとられるのあぶらをしばられるのと大評判になりまして、中には「区長の所に丁度年頃の娘が有るに出さぬのが何よりの証拠だ」と申すようになりました。それで父も決心致しまして、私を出すことにいたしました。

このように話が展開していくと、「私の親類の人、または友達、それを聞伝えて、我も我もと相成りまして、都合十六人出来ました」となったのである(13ページ)。

横田英たち一行16名は、2月26日朝7時に松代町を出立、その夜は上田に一泊、翌27日は多くは馬に乗り、追分に泊まる。28日は軽井沢を通り、碓氷峠にかかり坂本に宿泊。翌3月1日は安中の手前を左に折れ、富岡町に着く。「翌二日、一同送りの人々に付添われまして、富岡御製糸場の御門前に参りました時は実は夢かと思ひますほど驚きました」と記す(17、19-20ページ)。その時の感慨は、東書版小学校用教科書の図版の説明に明らかにされている。

次に就業時間について、製糸場到着三日目のこととして、

いよいよ事業に就きますことになりまして、先に入場して居ります人々は午前六時過ぎ頃その身の場所に参りますが、一番笛で部屋を出、二番笛で入場致すことになって居ります。

とある(21ページ)。一日の流れは、今井氏によれば「午前7時に作業開始、9時から30分間休憩、正午に1時間の昼食休み、午後3時から15分間休憩、午後4時半に作業終了という7時間45分労働が基本とされ、季節により休憩時間が調整されていました。8月には昼休みが4時間も取られました。蒸し暑い繰糸場内の労働環境に配慮されていたものと思われまふ」となる(『富岡製糸場と絹産業遺産群』106ページ)。

全国各地から集まってきた工女たちについて、「諸国よりの入場者と同県人の大多数」という項目がある。

一県十人あるいは二十人、少きも五六人と、ほとんど日本国中の人にて、北海道の人まで参っております。そのうち多きは上州・武州・静岡等の人は早くより入場致して居られましたから中々勢力が大した物であります。この静岡県の人は旧旗本の娘さん方でありまして、上品でそして東京風と申し実に好いたらしい人ばかり揃って居りました。上州も高崎・安中等の旧藩の方々はやはり上品でありました。武州も川越・行田等の旧藩の方々は上品で意気な風でありました。さすが尾高様の御国だけに、取締などは皆川越辺の人ばかりでありました。(24-25 ページ)

この尾高様とは初代場長の尾高惇忠のことである。士族の娘たちは上品であったというのである。それに相反して、

さて長野県はと申しますと、実に入場者の多きこと二百名近くありまして、私共が一番後から参ったように思われます。小諸・飯山・岩村田・須坂等の方々は中々上品でありました。すべて城下の人は宜しいように見受けました。このように申しましたら御立腹になる方もありますかも知れませんが、山中または在方の人は只今のように開けませんから、とかく言葉遣いその他が城下育ちの人のように参りません。何に致しましてもこのように沢山居りましてはその内に色々な人がありますから、ちょっと行儀悪う御座いまして、あれは信州の人だ、また信州の人があんなことをしたこんなことをした中々やかましく申しますから、それを私共が見聞き致しますと何とも申されぬほど恥かしく、またつらいように思ひまして、私共一同は決して信州と申さぬことに致しまして、長野県松代と申して居りました。(25 ページ)

とあり、長野県松代出身の横田英たちは肩身が狭かったようである。

本稿では製糸場における仕事の具体的内容は割愛するが、その身分については言及しておきたい。「一等工女」という項目がある。

さて私共一行は皆一心に勉強しておりました。中に病氣等で折々休む人もありましたが、まず内揃うて精を出して居ります。何を申しましても国元へ製糸工場が立ちますことになって居りますから、その目的なしに居る人々とは違います。その内に一等工女なる人があると大評判がありまして、西洋人が手帖を持って中廻りの書生や工女と色々話して居ますから、中々心配でなりません。

その内に、ある夜取締の鈴木さんへ呼出されまして段々申付けられます。私共は実に心配で、立ったり居たり致して居りますと、その内に呼出されました。

「横田英 一等工女申付候事」

と申されました時は、嬉しさが込上げて涙がこぼれました。(49 ページ)

横田英たちが富岡製糸場に伝習工女として勤めた誇りと、一等工女として認められた感激が素直に語られている。その後続に賃金についての言及があり、年功序列ではなく能力制であった。

月給は、一等一円七十五銭、二等一円五十銭、三等一円、中廻り二円でありました。(50 ページ)

本稿では行事を含めた生活面は省略しているが、食事のことは群馬の特性に触れているので言及しておきたい。「食物のこと」と題している。

一日と五日と二十八日が赤の飯に鮭の塩引、それが実に楽しみでありました。只今と違ひまして上州は山の中で交通不便でありますから、生な魚は見たくもありません。塩物と干物ばかり、折々牛肉などもあります。まず赤隠元の煮たのだとか切昆布と揚蒟蒻とハツがしらなどです。さすが上州だけ、芋のあること毎日のようでありましてから閉口致しました。朝食は汁に漬物、昼が右の煮物、夕食は多く干物などが出ました。しかし働いて居ますから何でも美味に感じましたのは実に幸福でありました。(55 ページ)

このように充実した日々を送る横田英一行であるが、富岡製糸場を去る日が近づいていた。まず「四月頃」の項目で

ある。4月初旬頃、尾高から横田へ次の言葉かけがあった。

「お前方一同能く精を出して実に感心だ。この後も御場所の御為明年まで止って勤めてくれるよう」と申されましたから、私は「国元へ製糸場の立ちますまではいつまでも御場所に居り、一心に精を出しまする心得で御座ります」と申しましたら、「一同にその由申伝えくれ」と申されましたから、直に帰りまして一行の人々に申しますと、皆同意でありまして、尾高様も大きにお喜びになりまして、(後略) (58 ページ)

ところが、

そのように申されましてお喜び下さいましたが、国元では埴科郡西条村字六工にいよいよ製糸場創立になりますことに極まりまして、六工社と名が付きまして、社長は春山喜平次、副社長大里忠一郎、その他元方増沢利助、土屋直吉、中村金作、宇敷政之進、岸田由之助の諸氏で、日々工事を急ぎまして、五月末頃にはよほど工事も出来致しましたとのことであります。(58-59 ページ)

という状況になりつつあった。やがて「国元より迎いの人来る」という事態にいたる (66-67 ページ)。

七月の初めに、いよいよ六工社創立に付き宇敷政之進、海沼房太郎両氏、松代工女一同御暇賜り度の願書を持って富岡御製糸場へ出頭致されました。

尾高様非常に御喜びになりまして、早速御聞届けになりまして、申されますよう、「このような愛度きことはこれ無く、御場所創立以来この度が初めて、実に悦ばしい。しかし今この出精なる工女一同を帰国致させるのは、当御場所において本年一カ年に九百円以上御損に相成るが、何も国の為なれば致し方がない。皆一同感心に精を出したから、帰りには東京見物にてもさせてやるように」と申されましたが、中々その頃そのようなことは思いもよらぬことであります。

それより私共一同役所に呼ばれまして、尾高様より御賞詞を賜りました。

繰糸業格別勉勵に付為褒賞金五拾錢下賜候事

製糸場印

右に姓名を書付まして、大方頂きました。

その後帰国の準備過程で戸惑いが生じたり、涙ながらの暇乞いもあり、やがて富岡町出立の日が来る。帰途高崎見物をして一泊、その翌日は坂本に泊まり碓氷峠越え、信州田中宿に一泊、上田を経由して坂城宿に泊まり、翌早朝矢代本陣柿崎に到着、ここで風呂に入り「富岡仕込みの厚化粧を致し」(71 ページ)、一行 14 名に付添人 3 名の計 17 名が、横田英の人力車を筆頭にお国入りを果たしたのであった。

そのパレードの沿道は、

何が田舎のことであり、十七台も車が続くようなことはこれまでないこととて、家に居る人は駈出す、道を行く人は止る、畑に居る者は鋤を棄てて駆付け見て居ると申す有様、十四名揃いの衣服で同じ年頃の者が揃って居ます、風俗もよほど違って居りましたから、皆珍しがって見物致すのでありましょう。(74 ページ)

という状況であった。横田英は先頭に立つことを逡巡していたものの、

このように沢山な人が見て居りますことでありますから、この度業を卒えて帰国致し、創業の製糸場に参りまして、機械(ママ)その他が富岡のように出来て居りますれば何も差支えもなけれども、何を申すも政府の御力で立てて居ります所と、その頃の人民の力で致すこと、万一成功致さぬ時は、私共は世間の人から何と申されましよう。自分のみかば親兄弟姉妹まで人に対して顔向けも出来ぬように相成るべく、また損を致しますれば、元方の方々にも気の毒、殊に私が真先に立ちますことでありますから、責任は自分が第一重いように感じまして、今まで喜び勇んで居りました松代が近くなるほど心配が増してまいりまして、(後略) (75 ページ)

とあるように、今後の責務の重さをひしひしと感じ始めるのであった。

なお、横田英のその後については『富岡後記』が存在する。これは『大日本帝国民間蒸気器械の元祖六工社創立第 10 年の巻 製糸業の記』『明治八年一月横浜市に於いて 大日本蒸気器械の元祖六工社製糸初売込』と題され、六工社の後進である本六工社に保存されていたもので、著者が一八七四（明治七）年七月から同十二月まで六工社で技術指導者として働いたときのことを思い返し、それぞれ、一九〇八（明治四一）年、一九一三（大正二）年に記述したものである」（前掲『富岡日記』所収、80 ページ）。

その書き出しは「私共一同は明治七年七月七日故郷松代へ着致しまして、その翌日は宅に戻りましたが、その翌日九日埴科郡西条村字六工に建築致されました六工社製糸場へ一同打揃うて参りました」とある（81 ページ）。その印象としては、

機械 <sup>(ママ)</sup> その他を見ました。兼ねて覚悟のことなれば別に驚きも致しませぬ。却って能くこの位に出来たと思いました。しかし富岡と違いますことは天と地ほどであります。銅・鉄・真鍮は木となり、ガラスは針金と変り、煉瓦は土間、それはそれは夢に夢を見るように感じましたが、まずまず蒸気で糸がとられると申すだけでも日本人の手で出来たとは感心だ位にて、その日は引取りました。（81 ページ）

とある。既述のことであるが、中村哲氏はここを引用して、「富岡製糸場の器械・設備を模倣しながら、それらを簡易化・小規模化し、すべて国産でつくりあげたのである。これは経営的・技術的に必要であった」と述べたのであった。

以上、『富岡日記』、『富岡後記』の紹介・分析については、この度はここまでとしたい。

## おわりに

本稿は筆者が最近見学した世界遺産を紹介する機会として執筆したものである。

また社会科教育に携わるものとして、小中高の教科書の該当箇所を並べることにより何が見えてくるかということも考えた。小中高という違いはあるものの、テーマの本質は変わらないことを確認することができた。簡略化していえば、なぜ官営模範工場として富岡製糸場は建てられたのかということである。

但し、授業担当者が注意すべきこととして、当然のことながら「歴史の流れ」を片時も忘れてはならないであろう。官営富岡製糸場にしても、お雇い外国人ブリューナの時代とその後の時代、さらには民間に払い下げられた後の時代も一律に見ることはできない。

また製糸業ということで、『富岡日記』と細井和喜蔵著『女工哀史』（改造社、1925 年）山本茂美著『あゝ野麦峠』（角川書店、1968 年）、『続あゝ野麦峠』（角川書店、1980 年）の描かれた時代が異なることを、いかに児童・生徒たちに伝えるのか、という問題がある。

1960～70 年代にかけて富岡市会議員を務めた高瀬豊二氏に『異郷に散った若い命—官営富岡製糸所工女の墓—』（初版 1972 年、復刻版 2014 年）がある。ここに「数かずの進歩的な方向を実施した富岡製糸所が、募集要項にかかげられている十五歳から三十歳までという一応のたてまえを無視して、このような幼少な工女を使用したということは、ひとつには日本における工場労働—とくに女性を使用する工場労働そのものが未知の分野であり、未経験だったということ、一つには貧しい家の子女が早くから他家へ働きに行き、あるいは子守娘となって、全国に多数の哀しい子守唄を残した。当時の社会状況からきたものであろう」という素朴な意見もある（86 ページ）。

文芸評論家の斎藤美奈子氏には「近代の女子労働史から見た『富岡日記』」（前掲『富岡日記』所収）があり、そこには「富岡と『女工哀史』は別なのか」という章立てがなされている。氏は「フランスの工場に準じた富岡製糸場は就労規則もフランス式で、年季奉公のような日本の伝統的な労働形態に比べると、はるかに近代的了でした」と述べるものの、「しかしながら、こうした『恵まれた』労働環境は富岡製糸場からはじまる製糸業の長い歴史の中では、ほんの一時期の『短い春』だったといわなければなりません。日清戦争を契機に生糸が輸出産業として成長し、製糸業が資本主義的性格を強めるにしたがって、製糸業界の労働条件は劣化の一途をたどったからです」と述べる。また「日本経済の屋台骨を支える基幹産業の担い手が一〇代の少女たちだったことを考えると、一見模範的に思える富岡製糸場にも、後世



の歪みを生む素地があったことは否定できません。官営製糸場の開設に際し、政府が一三～二五歳の女性を募集したのは、養蚕や糸織りが女性の仕事だった伝統（フランスでも同様）に加え、結婚前の娘たちは家庭内の余剰人員で、人件コストが低く抑えられたことも関係したはずで。その後、工女の低年齢化はさらに進み、英もく（西条製糸場の）糸揚工女も富岡のごとく十一二十三止まり位の少女女でありました」と記しています（167-169 ページ）。

さらに技術者として現場に向かい合った玉川寛治氏という方は『製糸工女と富国強兵の時代—生糸がささえた日本資本主義—』（新日本出版社、2002年）の「あとがき」を次のように始める。「繊維技術者だった筆者は、日本資本主義の発展を支えた紡績・製紙・繊維産業の技術の発達と女性繊維労働者の状態に関心を持ち続けてきた。製糸工場や紡績工場で働き続けてほんとうに幸せだったと思えるような職場にしたいと工場の仲間たちとさまざまな運動をしてきた。定期昇給で日給に一円の差がついて、それまで仲の良かったと友だちと気まずい何日かを過ごしたと語ってくれた一五歳の娘さん、いや労働者のことをそれから四五年過ぎたいまも思い出す。仲間たちとの友情を引き裂く賃金の本質を学びあった」と記し、「そうした経験から、繰糸工女の出来高賃金のなかでなぜ賞罰制がとられたのか気になっていた」と問題意識を深めた現場の方もいる（199 ページ）。

上記三氏を始めとする諸研究に学ぶことが、まずは官営富岡製糸場から現代への連続性と考えられないか、考察すべきことは多々存在する。少なくとも社会科担当教員として歴史の流れと本質をいかに生徒・学生に教え、学ぶのか、筆者もそこをテーマとして研鑽に励みたい。

#### [付記]

本稿をも総括する大著として、サンドラ・シャル氏の『「女工哀史」を再考する—失われた女性の声を求めて』（京都大学学術出版社会、2020年）がある。

本書の構成は序論によると、第一部において、戦前までの日本の製糸業の経済的な発展とその歴史的背景を概観。第二部と第三部においては、実際に製糸工女の〈声〉の検討を通して、彼女たちが自分の女工としての経験をどのように認識していたかを究明したものである（29 ページ）。

#### [参考文献]

- 赤煉瓦物語をつくる会『赤煉瓦物語』あさを社、1986年  
新井西司『学びパンフレット 世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」』富岡製糸場を愛する会、2020年  
今井幹夫『富岡製糸場の歴史と文化』みやま文庫、2006年  
今井幹夫『富岡製糸場と絹産業遺産群』KKベストセラーズ、2014年  
高瀬豊二『異郷に散った若い命 官営富岡製糸所工女の墓』オリオン舎、2014年  
玉川寛治『製糸工女と富国強兵の時代 製糸がささえた日本資本主義』新日本出版社、2002年  
富岡市、岡野雅枝『富岡製糸場—継承される革新の歴史』Echelle-1、2020年  
中村哲『明治維新』〈『日本の歴史』第16巻〉集英社、1992年  
萩原進、近藤義雄『富岡日記・器械糸織り事始め』みやま文庫、1985年  
細井和喜蔵全集刊行委員会／女工哀史記念会『細井和喜蔵全集』第1巻三一書房、1956年  
和田英『富岡日記』ちくま文庫、2014年  
山本和加子『「あゝ野麦峠」と山本茂美』角川学芸出版、2010年  
山本茂美『あゝ野麦峠』角川書店、1968年  
山本茂美『続あゝ野麦峠』角川書店、1980年

総合メディアセンター

センター長 神 田 和 也 (創造工学科 電気・電子コース)

同センター 図書メディア部門

部門長 菅 野 智 城 (創造工学科 基盤教育グループ)  
部門員 本 橋 元 (創造工学科 機械コース)  
〃 石 山 謙 (創造工学科 電気・電子コース)  
〃 ザビル サラウッディン (創造工学科 情報コース)  
〃 阿 部 達 雄 (創造工学科 化学・生物コース)  
笹 原 孝 紀 (総務課 図書情報係)

※本紀要に掲載された論文等については、  
全て執筆者が責任を負うものとする。

鶴岡工業高等専門学校研究紀要 第57号

令和5年3月発行

編集兼発行者 鶴岡工業高等専門学校  
山形県鶴岡市井岡字沢田104